



35th Anniversary
純パの会35周年
1982-2017

Pure 純 No.194 Pacific パ Nov.2017

純パの会会報『純パ』第194号

2017年11月25日発行／発行：純パの会

ニッポンのキング・オブ・ベースボール！ 祝・福岡ソフトバンクホークス8回目の日本二達成！

岩河 正剛

「ニッポンのキング・オブ・ベースボール」
福岡ソフトバンクホークス2年ぶり8回目の日本一達成。
歓喜の胸上げのシーンをずっと見ているうちに、自然とこの
フリーズが頭に思い浮かんだ。

この「キング・オブ」というフリーズ、スポーツの世界では何回か使われている。特に陸上の十種競技やスキートの複合の勝者には必ず与えられており、勝者はそれぞれ「キング・オブ・アスリート」や「キング・オブ・スキー」の称号を与えられる。つまり、「キング・オブ」というのは、同じ競技の中での様々なレギュレーションの違う種目すべてを克服してチャンピオンに輝いた選手に送られる賛辞のフリーズだ。要するにどんな条件でも勝つ、という事。これほどチャンピオンに勝利者「王者」キングに相応しい称号はないだろう。そして今年のホークス。交流戦、レギュラーシーズン、CS、日本シリーズというまったく違うレギュレーションですべてトップの成績をあげている。だから「ニッポンのキング・オブ・ベースボール」のフリーズが頭に浮かんだのだと思う。

ホークスの今年の闘いは、陸上競技の種目に例えてみると非常にわかりやすい。それぞれ例えるとレギュラーシーズンは42.195kmの長距離走(フルマラソン)、交流戦は5.000mのトラック競技(中距離走)、CSと日本シリーズは100〜2000mの短距離走になる(こういう例え方をすると、現在のプロ野球は長距離、中距離、短距離と陸上ランナーの全種目に相当する内容で興行されているのがよくわかる)。まずは得意の中距離走(交流戦)、伸び盛りのカーブと最後まで争うも、ゴール寸前でかわして優勝。フルマラソン(レギュラーシーズン)では、スタートからイーグルスがトップで快走するも、ホークスはある程度力を貯めながらその背後をつかず離れずの位置でキープ。35km付近でイーグルスに疲れ

が見えたところ、ここで貯めていた力を一気に出して追い抜きスタート！そのまま2位以下をおちぎってゴール(優勝)。最後の2つの短距離走(CS、日本シリーズ)では、それぞれ違うレースを展開。CSではスタートに多少出遅れたものの、中盤から一気に加速してゴール(優勝)。日本シリーズでは逆にスタートからスパートして、レース後半になるとある程度流しながらのゴール(日本一)。短距離走なんかは、まさしくウサイン・ボルトのようなレース展開である。これで長距離走(レギュラーシーズン)、中距離走(交流戦)、短距離走2種目(CS、日本シリーズ)、すべて制した事になる。違うレギュレーションをすべて制したのだから堂々のチャンピオンだ。

しかし、ホークスの強さは今年だけではないのがまた凄い。ここ最近5年間のすべてのレギュレーションの優勝回数を見ても、ホークスは交流戦4回、レギュラーシーズン、CS、日本シリーズ各3回の計13回とトップだ。次に多いのがイーグルス、ファイターズ、ジャイアンツ、カーブの各3回だから、いかにホークスが突出しているかがわかる。このような数年の実績から見ても、ホークスには賞賛の意味をこめて「ニッポンのキング・オブ・ベースボール」の称号を与えたい。

しかし、そんな盤石なホークスにも心配はある。それは、佐藤義則、鳥越裕介両コーチ揃っての退団。しかも両者ともにパ・リーグのチームへ移籍。チームとしてはかなり痛いのが、逆にこれで来年以降のパ・リーグではさらにレベルの高い展開を見られるはずだ。パ・リーグの発展を考えればこれで良かったと思う。他球団がさらに強い「ストッパー・ザ・ホークス」の気持ちで立ち向かってくるのは必至なので、それに挑むホークスにとって「ニッポンのキング・オブ・ベースボール」の真価が問われることになるだろう。
来年のパ・リーグも、今から待ち遠しい。